

「茨城歎異抄の会」通信 第22号

2025(令和7)年1月20日 発行

川崎愚光さん追悼号

自在庵



川崎 弘光

足も手も自由が利かなくなってみると、不思議ですよ。今までは自分で自分のことができたのに、だんだん自分のことができなくなってくる。掃除もできないし車の運転もできない。上宮寺の百日晨朝にも行けない。すると大原さんが、帰りに私の所に寄るようになる。庭に水をまいたり、家の掃除をしてくれたり、洗濯物を干してくれたり、一段落したら、時間の許す限り二人で仏法の話をするようになってきました。そのうちに住職の驚元さんも来てくれるようになりました。何か手伝うことないかというものだから、これやってあれやってとお願いするようになった。買い物にも付き合ってもらうようになった。

一人でも来て下さる人がいたら、仏法の話ができるでしょ。それだけでもう、ここは道場です。それで自在庵という名前を付けました。自由奔放という意味ではありません。不自由の中の自由自在、そんな意味です。

わたしは、病気になるって初めて、生活がなくなつたから仏法が死んでしまったのだという事に気づきました。

「生活は仏法であります」という小山貞子さ

んの言葉があります。仏法の言葉は短いですが、みな断定です。曖昧な言葉はありません。そして、現在進行形です。完成はしません。

根底にあるのは生活です。私も便利なものはできるだけ使わない。掃除にしても箒と雑巾しか使いません。掃除機なんか使いません。たしかにめんどくさいですよ。しかし、ポイントが分かってくるんです。四隅です。それは仏法に通じるものです。「一隅を照らす」といいますね。隅が大事なんです。畳などは隅のほうに埃がたまるんです。箒で畳を掃きますと、目の詰りを取ってくれるんです。

雑巾については、榎本栄一さんが、「雑巾」という詩を書いています。「雑巾は周りの汚れをふき取って、自分は汚れにまみれている」と。雑巾の中にも仏法があるということです。今は雑巾も使わない。モップになってしまいました。手で拭かないからわからないですよ。箒も手で掃くから「手加減」というものが分かるんです。便利な生活の中に仏法が働くわけはありません。仏法はお寺に行つて学ぶものになってしまった。頭に入れるもの。そうすると、講演会、研修会になってしまふわけ。帳面取って一生懸命頭に入れていくわけだ。聴聞じゃないんです。

お寺に行つても御講師の先生が来るまでは世間話。世間話がきっかけになって仏法の話になるんだつたらまだいい。サンガの中で仏法の話がないということはどういうことなんだ。そこは道場でも何でもありません。サロンですよ。老人ホームと変わりない。『じねん』第七三号